

村井不二子

(昭和女子大学)

【目的】1993年から3年間、文部省科学研究費の交付を受け、北海道開拓記念館所蔵の山丹服・蝦夷錦についてグループ研究をすすめた。北海道と北方大陸との交流の歴史を探り、本州との接点の位置付けを計り、また製作方法などについて考察するものである。

【方法】実物26点について文様の種類、意味、技法、材料、配色の調査、また計測し、写真撮影を加えた。

【結果】古代から中国の人々は雄壮な猛獣を勇武と威厳の印として男性服装に、美しい鳥を美として女性服飾に用いた。このような風潮は、唐、宋時代以降も継承され、更に種類の違った図案を組み合わせて意味を持たせたもの、また意味は違うが音(おん)が同じである言葉をめでたいものに置きかえるなどして民族的特徴を出している。歳寒三友、副従天来、双銭万年青、蓮年有余、富貴万年などである。この他、太陽と鳳凰、鶴と梅の木、金魚と海棠、草とざくろなどそれぞれにめでたい意味を持つ数多くの例があげられる。

その他の代表的吉祥文には、八仙文様がある。これは、中国古代の伝説上の8人の仙人の持ち物の文様である。八吉祥文様は、如舎利壺、法輪、宝傘など8種、八宝文様は、宝珠、方勝など8種、仏宝文様、七宝文様などがある。これらの表現技法は、織と刺繍とともに卓越した技法で製作されている。一部に色差した部分があるが、織り部分と見分けがつかぬ程の精妙な作業が加えられ、より複雑な効果をあげている。文様の配置は中央に対して左右対称が通例で、上下対称、逆対称、回転対称など、置き方に変化も見られ、1枚の衣服に使われた吉祥文の数は26種に及ぶものがある。